

海軍航空基地の形成と崩壊

横須賀から大社まで

若槻真治 著



はじめに

一九〇三年にアメリカのライト兄弟が世界初の有人動力飛行に成功する。その後発動機を付けた航空機の開発が急激に進み、一九一四年七月に始まった第一次世界大戦では、各国は兵器の一つとして実戦に投入した。

「富国強兵」を掲げる近代帝国主義の新興国で航空機の後進国であった日本も、第一次世界大戦に参戦して航空機を実戦で使った。日本は欧米諸国の動向に刺激されて航空機に関心を抱いていた。

日本における航空研究は、一九〇九年七月に陸海軍や大学関係者が「臨時軍用気球研究会」を創設した時に始まる。その後、欧州で操縦を学んで帰った陸軍の日野熊蔵と徳川好敏が、一九一〇年一二月に代々木練兵場で陸上機での日本初飛行を行い、陸軍は、翌一九一一年四月に国内初の航空基地である所沢飛行試験所（後の陸軍所沢飛行場）を開設する。海軍も一九一二年一〇月に初めての航空基地を横須賀（追浜）に開設し、同年十一月、欧米から帰った河野三吉と金子養三が水上機での初飛行を行う。軍用航空機と航空基地の歴史はこうして

始まった*。

日本では、最初は外国製の航空機を購入していたが、つぎにはライセンスを取得して国内で生産し、やがて機体や発動機も自前で生産するようになった。一九三〇年代後半には九六式陸上攻撃機や零式戦闘機をつくるなど技術は向上した。

そして第二次世界大戦では、戦局の帰趨を決める最重要の兵器として、総力戦体制の下で日本をはじめとする各国はさまざまな航空機を大量生産し、人命とともに消耗戦を展開した。第二次世界大戦が「航空機の戦争」と言われるゆえんである（本書では「満州事変」「日中戦争」「アジア・太平洋戦争」の全体を表す時には「十五年戦争」の用語を用い、一九三九年九月のドイツによるポーランド侵攻以降の世界大戦全体を指す場合には「第二次世界大戦」と言う）。

航空機と航空基地は一体の関係にあった。

航空機を格納する場、整備する場、訓練する場、作戦を練る場、出撃や退避をする場、そして搭乗員や整備員などが起居するのが航空基地である。航空基地がなければ航空隊員も育たないし実戦でも使えない。航空部隊の数が増えると航空基地も増え、勢力圏が拡大すれば航空基地を建設する範囲も広がった。

「航空機の戦争」の帰趨を決めた最大のインフラが航空基地であった。

海空戦を有利に進めるためには制空権が必要だが、制空権をもつためには自軍の航空基地を確保し、相手方の航空基地を奪取しなければならなかった。したがって東アジアや南太平洋地域にまたがる広大な領域で戦ったアジア・太平洋戦争では、ガダルカナル島のような太

平洋の島嶼で日米間の激しい航空基地争奪戦が繰り広げられた。本土決戦でも同様であり、米軍は日本の航空基地を最重要の攻撃目標にした。

そして航空基地の歴史も航空機とともにあった。

日本の航空基地の歴史は、最初の航空基地を開場してから敗戦まで三五年の短い期間だったが、これは兵器の脇役だった航空機が十五年戦争の間に主力に躍り出て、最有力兵器となり、そして航空基地とともに壊滅した歴史である。後述するように、航空基地はこの間、とくにアジア・太平洋戦争の開始とともに加速度的に増え、国内外で建設した航空基地の数は膨大な数に上る。戦局を打開するためには「航空機の戦争」で優位に立つほかに、航空基地がどうしても必要だったからである。

しかもただ単に数が増えるだけでなく、この間、航空基地は変化しつづけた。水上機が主力であったものが陸上機になり、航空機が大型化し、また当初は予想もなかった米軍による空襲が現実のものとなったから、航空基地もその都度姿を変えた。その歴史は軽視されてきたが、航空基地は戦争計画や戦局に応じて変貌を遂げたのである。

本書は、これまで論じられることの少なかった、海軍航空基地が生まれ、変遷し、壊滅する過程、つまり海軍航空基地の形成と崩壊の歴史を「航空基地の戦争」と捉え、「航空基地の戦争」を通して十五年戦争の実態をみようとするものである。

ただし、国内外で五〇〇カ所を優に超える陸海軍の航空基地の全部を対象にすることは現状では不可能である。とりわけ国外の最前線の航空基地は基礎調査すら行われておらず実態

はほとんどまったくわからない。本書は沖縄など離島を除く国内の海軍航空基地を主要な対象にして、基礎的かつ仮説的にその歴史を論じているにすぎない。その意味で「試論」であることをあらかじめお断りしておく。^{*}

本書は、まず第1章で航空基地研究の現状と課題を論じる。第2章では、海軍航空基地が増加するに至った背景と、海軍が最終的に何カ所の航空基地を建設したのかを論じる。第3章では、国内各所のおもな航空基地建設の経過を年次的に確認する。第4章では、航空基地に大きな変化をもたらした要因について考える。最終章の第5章では、全体のまとめとして航空基地の歴史を四期に時期区分して整理する。この章で、海軍航空基地の歴史はおおよそ理解していただけるのではないかと思う。そして最後に補論で、本書を書ききっかけとなった島根県出雲市の大社基地について論じる。

なお本書では、「飛行場」を滑走路やエプロン（駐機場）など航空機が実際に飛行する時に使う施設を指して用いている。また、「航空基地」は「飛行場」だけでなく、格納庫、庁舎、兵舎、燃料庫などを含めた施設全体を指して用いている。

航空兵力を訓練や実戦で運用する際に組織した部隊が「航空隊」であり、航空隊の編成単位が「飛行隊」であった。飛行隊一隊は、最初、常用機四機、補用機二機で編成したが、その後飛行隊の規模は著しく拡大した。

第1章

航空基地研究の現状と課題

- 1 — 航空基地研究の現状 16
- 2 — 航空基地研究の課題 20

第2章

海軍航空基地の増加とその背景

- 1 — 軍備増強政策と航空兵力拡大 29
- 2 — 予科練習生と練習航空隊 35
- 3 — 基地航空隊の編成 41
- 4 — 海軍航空基地の総数 44

第3章

海軍航空基地建設の概観

- 1 — 一九一〇年代～満州事変開戦までに開場した海軍航空基地 53
- 2 — 満州事変～アジア・太平洋戦争開戦までに開場した海軍航空基地 60
- 3 — 一九四二年と一九四三年に開場した海軍航空基地 83
- 4 — 一九四四年に開場した海軍航空基地 97
- 5 — 一九四五年に開場した海軍航空基地 108
- 6 — 本土周辺の離島に建設した海軍航空基地 118

第4章

海軍航空基地が変遷する諸要因

- 1 — 航空機の変化と滑走路の変遷 124
- 2 — 航空基地の施設配置の変化 138

— 3 — 航空基地の「分散」「秘匿」の実施 150

第5章

まとめ—海軍航空基地の変遷……………157

第1期 揺籃期の海軍航空基地 159
第2期 確立期の海軍航空基地 164
第3期 拡大期の海軍航空基地 171
第4期 解体期の海軍航空基地 182

補論

大社基地と大社基地遺跡群……………199

— 1 — 大社基地の研究史 200
— 2 — 大社基地建設の経過 214
— 3 — 大社基地に進出した部隊 223
— 4 — 大社基地遺跡群 231

— 5 — 大社基地研究のこれから 243

あとがき 248

注 256
参考文献 294
写真・図・表出典 305
海軍航空基地関連年表 309

第3章

海軍航空基地建設の概観

この章では海軍が航空基地を建設する経過を具体的に確認したい。
その前に注意しておきたいことがある。

第一に、前章で見えてきたような航空隊編成の動向が航空基地の建設と密接に関係することは言うまでもないが、航空隊の編成と航空基地建設とはイコールではないことである*¹。

たとえばすべての航空基地に基地航空隊を配属したわけではなく、特設航空隊が駐屯する航空基地も、訓練用や不時着用につくった航空基地もあった。また基地航空隊が開隊する以前に、分遣隊などが駐屯するために航空基地が開場していた場合もあるから、基地航空隊の開隊年次と航空基地の開場年次とがつねに一致するわけでもない*²。逆に航空隊が開隊しても、駐屯する予定の航空基地が未完成だったために、他の基地で訓練を始める場合や、航空基地が工事中でも概ねできた状態でいち早く航空隊が開隊する場合もあった*³。

第二に、航空基地の変遷を知るためには、それぞれの航空基地の計画作成、用地取得、工事着工、竣工、当初の整備状態などについてその時期や実態を確認することが必要である。しかし、計画・設計↓用地取

得↓建設の時期やその過程や実態を資料で確認できる航空基地は皆無に近く、ほとんどの場合は自治体史・郷土誌に断片的に残された住民の記憶や記録に頼るほかないから、事実を確定することは難しい。また航空基地は滑走路の延長や防空設備強化、あるいは本土決戦などのために二次、三次と拡張工事が行われることもたびたびあった。したがって、建設竣工の時期や状態も慎重に検討しなければならぬ。

このような限界を承知したうえで、いくつかの時期に区切って、主要な海軍航空基地の建設動向を概観する。

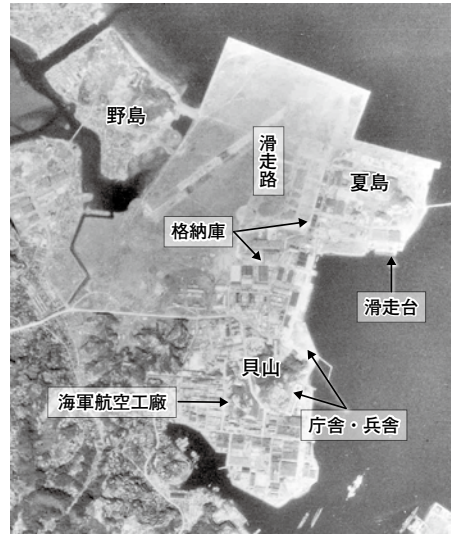
— 1 — 一九一〇年代～満州事変開戦までに 開場した海軍航空基地

一九一二年一月、海軍は最初の航空基地である横須賀を開場する。この横須賀から一九三〇年六月に開場する館山までをまとめる。

横須賀航空基地〔両用基地、神奈川県〕（写真1）

陸海軍が一九〇九年に合同で設立した「臨時軍用気球研究会」が陸軍主導であったため、海軍は独自に一九一二年六月、「海軍航空術研究委員会」を横須賀に創設する。この委員会が同年一〇月、横須賀の追浜に東西二〇〇メートル、南北六〇〇メートルの土地を確保し、海岸を埋め立てて海軍では初めての水上機用の航空基地（以下、水上基地と呼ぶ）である横須賀を建設した。

写真1 横須賀航空基地
野島、夏島、貝山が点在する海岸を埋め立てて建設した。水上機用の滑走台や格納庫、陸上機用の滑走路、海軍航空工廠の順に拡大した。滑走路は最終的に二二〇〇メートルと九〇〇メートルの二本があった。



その後一九一六年四月に、海軍初の航空部隊である横須賀航空隊を配置し、「三百八十坪の大格納庫」「飛行機修理庫」「間口三十三間、奥行十一間の大格納庫」を建設したという^{*4}。航空機を保管するための大型格納庫を飛行場に置くことは、霞ヶ浦などでも確認でき、当時の一般的な飛行場のスタイルであった。また水上機に比べ高速の陸上機も必要と考えたため、一九一八年から陸上機用の航空基地（以下、陸上基地と呼ぶ）の建設も始め、一九二六年三月に完成した。埋め立て地は約一五万坪で、そのうち約一一万坪が陸上飛行場用地であったという。これによって横須賀は水陸両用の航空基地となった。

またここは航空教育の拠点、予科練誕生の地であり、偵察教育、兵器教育、整備教育などさまざまな分野において教育や研究を行う「海軍航空における最高の教育機関」であった^{*5}。周辺には横須賀鎮守府、海軍航空工廠ほか海軍関係の政治、人事、経理、技術などの機関が集中し、海軍中枢を形成した。「海軍航空の（メッカ）」とも言われている^{*6}。

最初は水上基地として誕生し、その後海面を埋め立てて陸上基地も造成したために平面プランは不整形である。

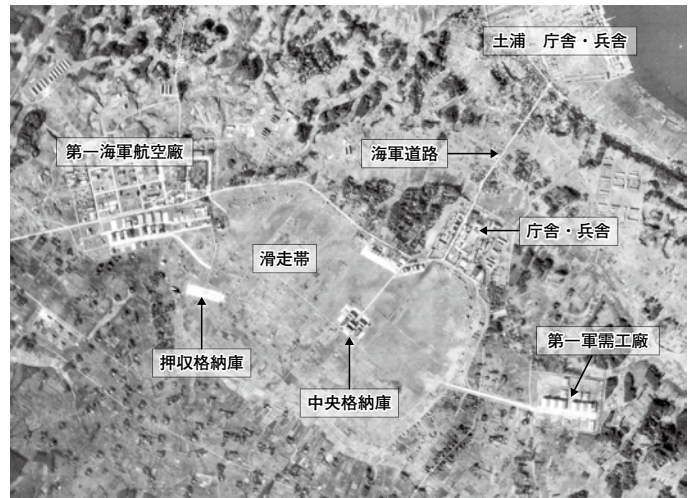
以下、いくつかの航空基地については米軍（進駐軍）が撮影した空中写真を参考までに掲載する。ただしこれらの写真が撮影されたのは敗戦後であり、航空基地がさまざまな変遷を経た最終段階の姿であったことに注意していただきたい。写真出典は巻末に記載した。また、それぞれの航空基地の建設の経過、用地買収の時期などについては自治体史や各地の郷土誌などを参考にしているが、個別に掲載すると煩雑になるために、巻末に「海軍航空基地参考文献一覧」としてまとめた。こちらも参考にいただきたい。

佐世保航空基地「両用基地、長崎県」

一九一四年頃から用地買収を始めたとも言われるようだが、建設過程についての詳細は不明である。一九二〇年に水上基地を建設し、海軍では初めての実用の水上偵察部隊である佐世保航空隊が開隊した。工事中の開隊であり、庁舎や兵舎の完成は一九二二年だった。「公文備考 昭和一二年K土木建築巻一〇」（以下『公文備考K』と略称する）や『公文備考 昭和一二年P会議巻五』（以下『公文備考P』と略称する）には、一九二九年から一九三七年にかけての用地買収の記録が残る^{*7}。水上基地周辺の海面を埋め立て基地の拡張を進めたようである。

また『海軍航空基地諸元表』では一〇〇〇メートル×九〇〇メートルの芝生の飛行場も掲載し、水陸両用基地としている^{*8}。おそらくアジア・太平洋戦争中に陸上基地としても整備したと思われるが詳細は不明

写真2 霞ヶ浦航空基地
海軍では最初に建設した陸上航空基地である。広大な芝生の滑走帯で、最終的には二一〇〇メートル×一三〇〇メートルの規模となった。土浦航空基地との間は「海軍道路」で結んだ。



である。

霞ヶ浦航空基地「両用基地、茨城県」(写真2)

一九一九年から用地取得を始め広大な敷地を確保した。海軍では最初に建設した本格的な陸上基地であった。一九二二年七月に開場し、翌年霞ヶ浦航空隊が開隊した。また霞ヶ浦湖畔には水上基地もつくり、水陸両用の航空基地であった。

一九三九年から予科練教育をここで行ったので、アジア・太平洋戦争では大きな役割を果たすことになった。一九四一年一〇月の海軍航空廠令によって第一海軍航空廠を設置した。水上基地は一九四〇年三月に土浦として独立し、予科練教育もここで行った。

大村航空基地「陸上基地、長崎県」

建設過程の詳細は不明だが、一九二二年に単独の陸上基地として初めて開場し大村航空隊を配置した。佐世保鎮守府との関係が深く、一九二九年以降は、佐世保鎮守

写真3 呉航空基地

海岸を埋め立てて水上機用の滑走台をつくり、後に陸上機用の滑走路をつくった。滑走路は斜めに一〇〇〇メートルの長さがあった。対岸には海軍工廠もあり、横須賀と同様に周辺には海軍関連施設が林立していた。



府所属の航空母艦「加賀」の艦載機の訓練基地となった。一九三七年に成立した③計画で拡張し、中国大陸への渡洋爆撃でも使用した。
一九四一年一〇月、当時は東洋一と言われ、五万人の工員を擁した第二海軍航空廠を置き、航空機や発動機、爆弾などを製造した。飛行場の平面プランは当初一一〇〇メートル×一二〇〇メートルのほぼ正方形で建設し、後に拡張したようである。^{*10}

呉航空基地「両用基地、広島県」(写真3)

一九一七年頃から用地買収も進んでいたようだが、基地建設に至る経過の詳細は不明である。横須賀、佐世保などと同じように、軍港などの要地に航空隊を置く計画にもとづき、一九二五年四月に水上基地を建設し、水上航空隊の佐世保航空隊広分遣隊を置いた。広分遣隊は一九三二年六月に水上偵察部隊の呉航空隊として独立した。同年から陸上基地の用地取得も開始し、翌年一月に工事着工、そして一九三四年一〇月には陸上基地も完成